

希望と不安のはざままで

内田敦之

●ミュージック・シーン

露のように澄みきった光を放つ星が輝く
 一晩中あこがれ恋いこがれて夢を見るよ
 水晶のようにキラキラ輝く黄金の陽光の中で
 初デートで彼女を待つような感じ
 ああ、ボクの十八歳
 二度とやって来ない永遠にかがやく日々

自分だけの秘密、輝く希望の中で
 自分だけが知っている顔を思い浮かべて
 夜明けに彼女の紅い唇でキスされる夢を見、
 目を覚まして恥じらう
 ああ、ボクの十八歳
 二度とやって来ない永遠にかがやく日々

一九九六年四月、はじめてのソロ・コンサート「アールワン・ナエマン・ナス（十八歳）」を開き、若者を熱狂させたグループ、カミルトンの大ヒット曲「十八歳」の歌詞である。モンゴルの若者に言わせると、十八歳という年齢はキラキラと輝くもつともすばらしい時期なのだという。モンゴルでは観客が立ち上がることは珍しいが、このコンサートでは総立ちになったそうだ。

カミルトンのメンバーは、リーダーのD・ボルド（この時十八歳）、L・ガンエルデン（二十歳）、B・エルデンバト（十九歳）、G・メンドアマル（二十七歳）の四人である。「十八歳」コンサートの前後には彼らのインタビュ記事が新聞に掲載されたが、その受け答えを見ると、茶目っ気たっぷりで夢を語るごく普通の大学生たちである。ルックス優先の日本のアイドルと比べると、カミルトンはファン自らが「ツアライ・モータイ（若男）」と言う

ほどだ。歌もずば抜けてうまいとも思えないが、それでもモンゴルのポップス黎明期にあつて、歌って踊れる四人組がはじめて出てきたことが、大ヒットの主たる原因になったのだろうか。日本人留学生の中にも熱狂していた人がいた。まさに時の人、アイドルのはしりとでもいうべき存在である。

モンゴル国は人口が極端に少ないので、スターといっても驚くほど身近な存在である。「ああ、彼女だったら友人の友人だよ」とか、「あのバンドのボーカルは私の親戚です」とか、そんなことがけっこう多い。ディスコのゲストとして舞台上歌っていたかと思ったり、ホールに下りてきていっしょに歌ったり踊ったりす



カミルトン。

るような、人なつっこいモンゴル人の性格もそうさせる一因になっているようだ。日本のスターのようにほとんど神格化された遠い存在ではなく、スターと観客との関係がちょっとイイ感じなのだ。

モンゴル国のロック・ポップス・ベスト一〇を見ると、ハル・サルナイ(黒バラ)、ハラシガ(ドラ)、スンス(魂)などのバンドやタイワンバット、アリオナーなどのソロ・シンガーが名前を連ねているが、モンゴルのミュージック・シーンを語るさい、やはり忘れてならないのは、知名度、人気、実力ともにナンバーワンの「サラ」ことB・サラントヤールである。ポップスを歌ってよし、バラードよし、民謡よし、とレパートリーも幅広い。

サラは、長くバンドのボーカルとして活躍していたが、最近はソロ活動が多くなった。一九九五年秋にはシングルポール録音のCD「イネームトギー・フン」(G.M.H.「ING MAN」)を、一九九六年春には「アラググイ・アムラグ」(The Inseparable Lovers)をリリース。タイトル曲もそうであるが、このアルバムには民謡も何曲か入っている。

モンゴルでは若者の間にも民謡がすっかり息づいてい



サラントヤール。

かわらず、海外に暮らしているモンゴル人のノスタルジーは、日本人にはちょっと想像できないほど強い。モンゴルの歌詞にはそれがよくあらわれている。ただ気になるのは、そんな素晴らしい故郷も、これからは自分たちが意識的に守っていかなければ失ってしまうことになりかねない、そんな時代が到来しているということ在未来

る。モンゴル人は宴会で酒を飲むと、よく歌を歌うが、ポップスよりはむしろ民謡の方をよく歌うようだ。モンゴルの宴会に出るなら、一曲や二曲のレパートリーがないと気まずい思いをするかもしれない。宴席で一曲披露すれば、拍手喝采、アンコールの嵐まちがいなしである。牧民は馬上でよく歌を歌う。広大な草原で風に吹かれながら思う存分歌うのだ。モンゴルの歌には、そんな草原の広がりや風の音やにおいがいっぱい詰まっている。

若者が聞く音楽にはもちろん恋心を歌うものが多いことはいまでもない。ただ、それとともに母や父をテーマにした歌(やはり母の歌が多いが)もよく歌われる。日本の若者が聞く音楽は、ほぼ百パーセント恋愛がテーマになっていることを考えると、何とも不思議な感じがする。モンゴル人の親子関係のあり方が反映しているのだろう。親子の絆は日本人よりも強いかもしれない。

さらにこれは若者だけに限らないが、モンゴル人は望郷の念も強い。日本人が海外で日本を思うとき、その便利さや快適さがかなりのウェイトで入ってくると思うが、モンゴルは物質的にも豊かでないし、「先進国」といわれる国々と比べて便利さや快適さも落ちる。それにもか

を担う若者がどれだけ認識しているのかということである。

●週末のディスコ

レストラン、食料品、電化製品など多くのチェーン店を展開しているジェンコ社のディスコ「ハリウッド」(モンゴル語では「ゴリウッド」という)に行く。モンゴルの

店はほとんどそうなのだが、うらびれたビルの外側には何の表示も看板もなく、ビルの中へ入っても「こんな所にディスコがあるのか」という感じである。さらに階段を上がっていくと、やっと「ディスコ」という控え目な表示があるが、入口もずいぶん地味である。ところが、その中に入るとビルの外観からはとても想像できないようなディスコが忽然と現れる。規模は小さいがライティングも立派で、音楽は最新のヒットチャートがガンガンかかる。

これは、ウランバートルでは、香港のスターテレビやMTVなどが、普通のチャンネルでも週に二〜三回、最近普及しつつあるケーブルテレビと契約すれば二四時間自由に見られるようになったことも関係している。踊っている年齢層は、大学生を中心に高校生から上は四〇代くらいの人まで。また、週末になると、日本人の若者を中心に外国人が集まり、ウィークデーの疲れをいやし、大いに楽しんでる。営業は九時頃からだが、客がテール、ホールにあふれて盛り上がりだしてくるのは大体深夜になってからだ。イベントももりだくさんで、人気バンドのライブ、歌合戦、ダンスショー、腕相撲大会、さら

こでも耳をつんざくような大音量で音楽をかけているところが多い。あの静寂につつまれた草原から出てきたモンゴル人たちが、(実際には民族衣装を来た本当の遊牧民を見かけたことはないが)この騒音の中でどうして座っていられるのか、あの遊牧民族とは別の種類の人たちがいるのではないかと思われるほどだ。

外国人のわれわれから見ると、その圧倒的なパワーに「若者文化の中心はディスコだ」と錯覚してしまうかもしれない。しかし学生は学業の方もけっこう忙しく、また入場料の五ドルやドリンク料は普通の学生にとってそれほど安い値段ではなく、ディスコ通いをしている学生は実際にはそれほど多くないようだ。

ディスコに入ったついでに、若者のファッションに目をやると、思いのほかみんなおしゃれに着飾っている。一九九六年夏、女の子の間ではへそを出したファッションに人気があったようだ。ハッとさせられるモデルのような女性も見かける。もともとロシア経由でヨーロッパ風のファッションに親しんでいたことも影響しているの

とくに民主化後はスターテレビ、MTVなどの番組、

にストリップまである。このごった煮的ふんいきのまま、閉店の四時(または五時)まで大いに盛り上がる。これがたったの五ドルで楽しめるのだ。ちなみにソフトドリンクは二ドル、ビールでも三ドルほどである。

一九九五年頃からブームのついで、ディスコが次から次へとオープンした。シンガポールと合併の「シーモ」は、二階席のテラス形式をはじめとり入れた。ホールの広さがもっとも大きい「カメレオン」は、他のディスコより入場料を安めに設定し、ワン・ドリンクも付けたので学生の人気を集めた。さらに「ハリウッド」と同じジュンコ系列の「モトロック」は、店内にオートバイやタイヤなどのパーツをインテリアとして使い、二階のテラス席もあり、いま人気ナンバードのディスコである。

その他、ウランバートル市内には、「ウランバートル」「バヤンゴル」などのホテル内に、また「エモン・クラブ」などの「バル(バー)」と呼ばれる場所がいたる所にある。ここは通常でも音楽がうるさく、何度音量を下げると言っても、いつのまにか上げてしまう。そのうち「こういう場所なのだ」と受け入れるほかなくなるが、とくに深夜をすぎるとバルはディスコと化すので、ど

さらに欧米の最新の映画が自由に見られるようになった(日本で公開されたばかりの映画がすぐにレンタルビデオに並ぶ。ロシア語で吹き替えした海賊版がどんどん入ってきている。ここでは情報の速さに驚かされる)ことも影響して、若者のファッション・センスはどんどん磨かれている。

●心の病

最近、自殺が増加していると聞いたので、若者にこのことを聞いてみたが、「考えたことがない」という答えが多かった。なかには「エーッ。神様、仏様……」などと絶句して、驚きと戸惑いをあらわにする者もいた。だが、自殺は社会問題になりつつあるようだ。

ある新聞記事によると、一九九一年以前はそれほど変化がなかったが、一九九二〜九三年に激増、一九九四〜九五年は減少したものの、一九九六年、ふたたび増加傾向にあるという。自殺者の四〇％は二六〜三五歳であるというが、一五〜三〇歳の年齢層が大部分を占めているという統計もある。そして自殺者の三分の一が失業者、三〇％は酒を飲んで酔っぱらっていたという。自殺の原因は、家庭不和がトップで三四％、次いで、アルコール、失恋、生活困窮、借金などである。

アジア読本
モンゴル

一九九七年二月五日 初版印刷
一九九七年二月一日 初版発行

編者——小長谷有紀

発行者——清水 勝

発行所——河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二

☎〇三―三四〇四―二〇一(営業)

☎〇三―三四〇四―八六一(編集)

振替 〇〇―〇〇―七―一〇八〇二

装丁 松田行正・竹内紀子

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1997 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN 4-309-7264-7